



# ピッポ新聞

2004

7

No. 189

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

## ピッポ

〒424-0886 静岡市清水草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

Email [pippo@diana.dti.ne.jp](mailto:pippo@diana.dti.ne.jp)

### 大型絵本について考えてみる

#### その4

先日お会いしたある出版社の編集長は、「結構要望はあるが、自分の所では大型絵本を作るつもりはない」と、はっきりと否定していました。その最大の理由は大型絵本は絵本の質を変えるからだおっしゃっていました。続けて、冗談半分に「経営が傾いてきたら、方針が変わるかもしれないが・・・」とも言っていました。

さて、先月号では、福音館の書籍編集部長の大和さんからの回答を掲載させていただいた上で、その回答書にたいしての再質問を併せて掲載いたしました。残念なことにそのご返事をいまだ(7月1日)いただいております。

これを読んでくれた人からは「福音館から返事きた?」ときかれます。読者は福音館書店の回答を期待しているのです。読者に対して自社の出版物に対する、版元の説明責任というものもあると思いますよ。お忙しいとは思いますが、どうぞご回答をくださるようお願いいたします。

今号では二人の方に、「大型絵本に」についてのご意見をお寄せいただきました。小泉さんはもう30年近くも、静岡で子どもの本や「おはなし」などの活動をされてきた方です。ピッポよりも長い間子どもの本と関わってきたというわけです。もう一人の川口さんは3年前に退職されましたが、30年以上も幼稚園で子どもと子

どもの本に関わってきた方です。二人のご意見は長い間の実践に裏打ちされたものであり、子どもと絵本(お話)との関係がとても良くわかりました。とても、ぼくの及ぶところはありませぬ。参考になりました。

### 大型絵本につて

#### 感じていること

小泉亮子

まったくの個人的な見解を体験した中から書きます

わたしはおもにお話をしていきますので絵本の読み聞かせはお話と一緒にします。其のとき大型絵本を使うとその場の雰囲気壊れるとかんじます。

大型絵本を使わなければ見えないような大勢のところではやりません。絵本もお話にあわせて選びます。それは子どもがお話を聞いた満足感をお互いに持ちたいからです。ですからたつぷりとした昔話を語った後では「ことば」や「おと」を楽しむ絵本を選びます。なんといつても読み聞かせやお話会では、相手をきちんとかかむことが一番大切なことだと考えています。

こどもと常に一緒に生活している大人や教師や保育士さんには及びませんが長くお話ししていきますと、お話を始める前に子どもの様子を見て出来るだけ子どものありようをつかむことに努

力します。なかなか難しいのです。子ども様子に合わせてプログラムの変更をしなければなりませんから。これは決して子どもに「おもねて」ではないのです。

あるクリスマス会にお誘いを受けて参加しました。参加している子どもが多いのでお話は子どもが楽しめるかと危惧しましたが、幸いなことに参加している子どもも学校にお話にいらしてましたので子どもも知っているお話にしました。

其の後で他の会の方が大型絵本を持ってきて始めました。よく使われるエリック・カールの「はらぺこあおむし」です。最初のページで夜の場面から。次は朝日が画面いっぱい描かれています。

そこは時間がどうすぎたかをページをめくるのに工夫が必要ですが、そんなことはおかまいなしに始まりました。そして、あおむしを「ぬいぐるみ？」というのでしようか作ってきてそれを、あおむしの食べた穴に押しつけていきましたが、絵本をきちつと読みとってしまいましたらそんなことは出来ない話だと思いました。

子どもたちはなんだか分からないがザワザワしながら見ていました。物語の中に入っではいけません。ぬいぐるみや、絵本に出てくるキャラクターを作ってしまうと使いたくなる気持ちは分からないでもないのですが、それはあくまでも大人の楽しみでこどもにとってどうだろうかと思いません。

私は養護学校で「からすのばんやさん」を使いました。これは国語の授業でこのお話を知っていて、からすのばんやさんのつくったたくさん数のばんを楽しみたかったから読んでみました。

大型絵本を使うには一人ですべて読むには体力が足りません。そこで机に置きますが、机の高さも考えなければなりません。読み手とめくり手のタイピングを練習しないとイケません。絵本はページをめくる速度で時間の過ぎ方が違いますからとても大変です。

サツとめくることは普通の絵本では簡単ですが、大型絵本ではなかなか技術を要します。厚紙で出来ていますから、ためてめくるということができません。紙芝居はその点考えられています。大型絵本は普通の版のものとは異質のものであります。

きちんとお話のように覚えて使えばベストかもしれないですが、そこまでする価値のある媒体でしょうか。本の世界を伝えるより子どもを驚かす、という意外性を楽しむものだと思います。

確かに子どもを引き付けるかもしれないが、それはお話・物語の世界に入っ楽しむというのとは子どもの精神の働きが違います。子どもを違うところで刺激する媒体です。

私たちがなぜ子どもに本を読んだりお話をしたりしているかを考えれば自ずと答えが出てくると思います。大型絵本を家庭で楽しく使うことにはと

やかく云うことではないと思っております。其の家庭の責任においての楽しみですから。ただ大勢の子どもたちに行きたくて読み聞かせをする立場の人は一考しなければならぬと考えます。

(公立図書館の司書さんが扱いに苦慮しているという新聞にもありました。)

## 保育の現場から

### 大型絵本を考えてみる

川口三鈴

「大型絵本」について、私は保育者の立場から意見を述べさせていただきます。

以前、絵本の研修会会場で初めて「大型絵本」を「行事の時などにいかがですか」とすすめられました。その時感じたことは「これは絵本じゃない」ということでした。

子どもたちにとって、手に持てるサイズの絵本の中に魅力的なお話の世界が詰まっている、絵本をめくりさえすればいつでもそのお話の世界に入っていける、そしてお話を楽しんで絵本を閉じて、また現実の世界にもどってくる、それができるとても大切なことのように思います。

また、絵本の絵は大きければ良いというものではないと思います。あの「ぐりとぐ

ら」の「きいろい かすてらが ふんわりと かおをだしました」という、子どもたちが大好きな場面。子どもたちには目の前がまっ黄色になるほど大きなカステラが、おいしそうな匂いと共に見えているに違いありません。

「おおきなかぶ」も、佐藤忠良さんの絵を手がかりに、子どもたちは「とてつもなく おおきいかぶ」をそれぞれのイメージとして膨らめて見ているのだと思います。

現実と架空の狭間を縫って、子どもがファンタジーの世界に入っていく時、そのことが現実過ぎて、嘘過ぎて、うまく入っていけないと思います。絵本作家の方々は、絵本の大きさ、形、絵の表し方、文章等、十分な配慮をして、現実過ぎず嘘過ぎず巧みな表現で、あつという間に子どもたちをお話の世界に誘い込んでしまします。

絵本が大きくなって、描かれた絵も大きくなって、現実にならなければならぬ子どもたちはファンタジーの世界に入り込んでくくなっていくように思います。あのカステラの場面を普通サイズの絵本で見た時と「大型絵本」で見た時とは、子どもの心にイメージとして残るカステラの大きさは、普通サイズの絵本の方がはるかに大きく膨らんでいるに違いありません。

保育の現場での読み聞かせでは、全員の子どもたちに絵が見えるかなと気になります。

しかし、子どもたちは大好きな担任が絵

本を読んでくれる、そして担任とクラスの友達と一緒に、楽しいお話の世界に入り、すてきな時を過ごす。

そのことが嬉しくて、小さな画面に神経を集中させて実によく見てくれます。

担任がクラスの子どもたちに読み聞かせをした絵本を、今度は子ども自身が手にして開いて見たり、自由な遊びの時に「先生読んで」とせがんだりすることが多くあります。

そしてその時、じっくりと絵を楽しみ、みんなと一緒だった時には気づかなかつた「絵が語るお話」をいっぱい見つけながら絵本をめくっていくのではないのでしょうか。

つまり保育の現場では、特別なことではなくごく日常的なこととして担任による読み聞かせが行われていること、子どもがいつでも絵本を手にとることができるように身近に十分用意されていることが大切だと思います。

「大型絵本」を、担任がクラスで読んでいる状況は、想像するとちよつと滑稽ですし、「大型絵本」が日常的に読み聞かせに使われるという状況も考えにくいものです。

しかし、私が初めて「大型絵本」にお目にかかった時、多分これは欲しいという園が結構あるのではないかなと思つたことも事実です。

なぜなら、日本の保育現場では、行事中心に保育を進めていく園が多いからです。行事の無い月が無いといつてよいでしょう。毎回出し物に思案する園にとつては、

この「大型絵本」は、ひとつのお助けグッズになることは容易に想像できます。

しかし、行事を一つ一つこなしていく生活よりも、自由な遊びを中心とした何気ない普通の生活での、子どもたち同士の間人間的なかわりの中にこそ、子どもたちの成長の糧があるはずなんです。

そして、そんな時にこそ、一人で、または少人数で、担任に寄り添って絵本を読んでもらえたら、子どもにとってこれほど嬉しいことはありません。

それから、「大型絵本」が多分売れるであろうと思つたもうひとつの理由は、残念ながら絵本が保育の現場に十分入り込んでいない状況があるということなんです。

保育の仕事をしていると、他園にお邪魔する機会がありますが、そんな時はいつも、その園の図書室や保育室の絵本コーナーを見ます。しかしほとんどの園には図書室がありません。ちよつとした空きスペースに図書コーナーらしきものがあつても、用意されている絵本は、内容、量ともにお粗末です。

保育室の絵本コーナーもまた、季節感があふれ、その時の子どもたちの興味にあつた絵本が用意されているところは、ほとんどありません。

絵本が生活の中にならぬ位置づけられている園では「ぐりとぐら」や「おおきなかぶ」「ぐるんぱのようちえん」など「大型絵本」になつているほとんどの絵本は、何度も担任が読み聞かせをし、子どもたち

も繰り返して自分で絵本をめくり、すっかり身近なものになってはいます。そんな園ではそれを「大型絵本」で読み聞かせをすることに何の意味があるのでしょうか。

しかし、絵本が日常生活の中に位置づけられていない園では、絵本の読み聞かせはちょっと特別なことなのではないでしょうか。だから、特別な行事で「大型絵本」を読むことになんの抵抗も感じないのだと思います。

裏を返して言えば「大型絵本」を保育現場に入れることは、絵本の読み聞かせを非日常的なこととして認めていくことにつながるような気がします。

私は、もう30年以上前、幼稚園教諭になつたばかりの頃、絵本の研修会で福音館の松井直さんのお話を聞いて読み聞かせのすばらしさを学びました。

そのとき「これから、なるべく毎日クラスの子どもたちに絵本の読み聞かせをしたいと思います」と言つた私に、松井直さんは、「『なるべく』ではなく『必ず』毎日してくださいね」と言われました。

それ以来私のクラスでは、子どもたちにとって毎日の食事をとるのと同じように、担任に絵本の読み聞かせをしてもらうことが、ごく日常的な生活の一部になりました。

出版社のような絵本作りに関わる仕事をされている皆さんは、多くの保育現場では、絵本の取り組みがまだまだ十分ではないことを認識する必要があると思います。

保育者受けする絵本作りに力を注ぐより、全国の保育現場の津々浦々で、毎日当たり前担任が絵本の読み聞かせをし、子どもたちの身近に絵本がいつも置かれている状況を作るための、絵本の普及に努力をしていただきたいと思っています。

保育者や子どもに関わる大人の立場から絵本作りではなく、常に子ども立場に立つた絵本作りを進めていくという信念を持ち続けて、これからもすてきな絵本を子どもたちにめぐり合わせて欲しいと切に願っています。(終わり)

以上がお二人のご意見ですが、みなさまはどのようににお感じになりましたでしょうか。

ところで、近頃は全国の学校では朝の10分か20分間、全校一斉(?)に読書をするのが流行っている(全国で何千校も取り組んでいる)のだとか。これを略して「朝読」というのだそうですが、ぼくは「朝毒」の間違いではないかと思つた次第です。

もし、一人の子がその「朝読」の時間を越えて、もっと読みたいと言つて読んでいたら、こんどは先生は「授業だから、おや

めなさい」ときつと止めるのでしょね。逆に、そのとき本を読みたくない子も強制的に本を読まされるのでしょうか?

これって、どこがおかしくありませんか。本を読むってのは個人的なものだし、自由な行為であつて、一斉に「サー読みましよう」などというものはちがいます。

ぼくは時どき、本を読みながらウトウトしてしまうこともあります。これが意外と気持ちいいです。逆に、夢中になって、夜を徹して読み続けることもあります。とても充実感を得られます。

でもね、こういう読み方って「朝読」では許されないでしょうね。読書するのは誰もが持っている人生の時間のおもしろい消費の仕方の一つだと考えています。読めと強制されるものでもないし、一斉にやるものでもないのです。

その人がいつ読もうが、いつやめようが、それにもう一つ、何を読もうが自由。それが本を読むってことだと思つた。

人に読書をする習慣があれば、人生の有効な暇つぶしの一つになるし、もしかして豊かな人生を送る手段にもなると思います。

## インフォメーション

\* 今月の「ばあやのお話か」7月24日(土)午後2時からピッポでやります。夏休みどんなお話きけるかな!